

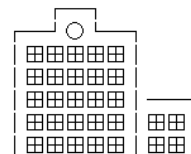
● 信州大学物理同窓会会報 0050 号 (2014 年秋号) SUPAA BULLETIN No. 50 ●

● 2014 年 10 月 28 日発行 ●

■——■ 発行所・信州大学物理同窓会事務局 (<http://www.supaa.com/>)

■——■ 〒390-8621 松本市旭 3-1-1 信州大学理学部物理教室内

■「旧文理学部物理学科」+「理学部物理科学科」OB & 学生と教員の会 ■



はじめに

日経新聞が7月に出版した『大学選び 2015 年版一本当の「社会や企業が評価する就職力」が育つ大学ランキンダー』（上場企業 433 社が回答）で、信大は総合ランキングは 33 位、国立 17 位でした。が、側面別ランキングでは「知力・学力」で 21 位、「独創性部門」でなんと 1 位！大学の取り組みランキングにおいては「地域の産業・文化に貢献している」でも 1 位で、有力企業からたいへんな評価を得ています。

一方、今春の信大は受験生が約 1 千人も増えて人気化するなど、大学としての価値

が高まっているようで嬉しいかぎりです。

この陰には、独立行政法人に移行後ほぼ 10 年、大学関係者の皆さんの血のにじむような改革改善への積み重ねがあり、その成果が徐々に顕れてきたともいえるでしょう。

当誌は、今号で 50 号を数えます。足掛け 15 年、よく継続したものです。特集に、尾関新学部長へのインタビュー。曲がり角にあるとみられる理学部をどう引っ張っていかれるのか、お聞きしました。また、誌面もメルマガから PDF 形式に一新。今後も、会員相互の架け橋になっていければと思います。（高）

【 I ・ N ・ D ・ E ・ X 】

- ◇ 尾関寿美男理学部長インタビュー(前編) いま取り組むべき課題とは何か!?
- ◇ 名月 (「松本平タウン情報」より転載) 宮地 良彦
- ◇ 青少年のための科学の祭典 2014 ー松本大会ー を振り返って 竹下 徹
- ◇ 信州の秋を想うー岡田君が作った歌 小林 善哉
- ◇ [学年・研究室世話人からのおたより] 高エネルギー研究室 大下 英敏
- ◇ マリアナ諸島慰霊巡拝記 寺尾 洸
- ◇ 文化財を守った膨張係数 平林 喜明
- ◇ | 名 | | 簿 | ■ 住所不明の同窓生についてのお願い ■ 小西 義雄
- ◇ [思い出の情景] 文理学部初年 (1 回生) の記念写真 青木 治三
- ◇ <再録> 「同窓会費」は終身会費として 1 万円『会計細則』決まる!
- ◇ 編集後記

《物理同窓会会報 50 号記念 特別企画》

●尾関寿美男理学部長インタビュー(前編) いま取り組むべき課題とは何か!?

本年度より信大理学部長に就任された尾関寿美男化学科教授に、理学部の現状と課題についてお聞きしました。おりしも来年度より、理学部は 6 科制から 2 科 7 コース

制へと移行することが9月に決定。新学部長はどこへ向かってどのように舵取りをされるのか。山積する問題は多く、多方面からご意見やお考えをお話いただきました。今回はその前半。たいへん興味深い内容です。聞き手は当会の高藤事務局長（理学2S）。

理学部が連携して取り組める「グリーンサイエンス」のプロジェクト

Q： 昨日、ノーベル物理学賞にLEDの研究開発で日本人3人が選出されました。まず最初の質問として、この件に関しましてご感想がございましたらお聞かせください。またまた、尾関先生も関係が深い名古屋大学、京都大学出身の方が評価されて受賞しましたね。

A： 天野さんは名古屋大学出身でうれしいんですけども、ただ工学部でやられた仕事で、まあLEDだからそうなのでしょうけど。赤崎さんは京大の理学部出身で、いま理学部の存在意義がかすんできているので、たいへんよかったなと思います。理研（理化学研究所）の問題もありましたんで、そういう意味でも、非常によかったんじゃないかと思えます。名古屋大学の場合、理学部だけなのかもしれないけれど、上下関係がまったくない大学です。教授の先生を僕らも「さん」付けで呼んでたりして、リベラルといえバリベラルで、外から見ると生意気な奴、生意気な学生と見えちゃうようですが。そういう体質からも成果があって、当時の研究が評価されているのかなと思うんです

Q： それでは話を信州大学理学部に移させていただきます。「信大理学部の将来ビジョン」についてですが、今度理学部長に就任されて、どのようなビジョンといたしますかデザインといたしますか、将来像を描いてらっしゃるのでしょうか。将来こういう風にしたといった構想などがございましたらお聞かせください。

A： 武田前学部長のときにだいぶ長く副学部長をやってまして、目先の問題を解決するというのが私の仕事でした。ですから学部長になったときに、理学部のグランドデザインといたしますか、大学では10年ほど前につくったんですけど、10年後5年後のスパンで見通した、理学部のそういったビジョンとかをつくらなくてはいけないと思っています。改組問題等に迫られて、そこまで先を見通しながらしてこなかったんですけど。今はビジョンといたしますか、文科省からもミッションの再定義といたしますか、どういうミッションで行くのかを問われています。

まずは、いい人材を輩出するということですね。創造性のある人材を輩出するということと、いい悪いを別にすると、理学部って、所帯が小さくって、専門もすごく細分化されてて、隣の研究室と一緒に何かやるってことも非常に難しい環境です。いろんなプロジェクトは連携してやるようにできていますが、なかなか理学部からそういった大型のプロジェクトにアプライすることが難しい。それゆえにお金がないですね、理学部は。だから負のスパイラルみたいな、何かやりたくても予算が獲れなくて、大型プロジェクトがやれない。獲れば、何とか間接経費でいろんなプロジェクトができるのですが、



尾関寿美男 信州大学理学部長

所属学会：日本化学会(理事)、日本磁気科学会(会長)、日本吸着学会(副会長) ほか
愛知県出身

学歴：1976年 名古屋大学理学部卒業

1981年 名古屋大学大学院理学研究科 博士理学研究科修了(理博)

研究職歴等研究職歴(抜粋)：

1997～ 信州大学 理学部 教授

1991～1997 千葉大学 理学部 助教授

1989～1990 ワシントン大学化学科
博士研究員 生物物理

1986～1991 千葉大学 理学部 講師

1981～1986 千葉大学 理学部 助手

(信州大学学術情報 SOAR 研究者総覧より)

個別の理学部独自のプロジェクトとかそういうことがまったくできない。何とかいまは「グリーンサイエンス」という言葉でくくって、それに関連する研究を連携してやれないかということで、いま、工学部と一緒に概算要求で、「グリーンイノベーション」というので出しているのです。なかなかうまくいかないですが……。そういうことで、連携して取り組める、理学部全体で取り組めるそういったテーマでやりながら、連携した研究環境を構築していきたい。学科の壁を取り払ったようなそういう状況を作ろうと思っています。

信大理学部の将来ビジョン、そしてミッションを決定づける4項目！

Q：なるほど。斬新な発想ですね。

A：それからやはり信大の場合、環境はいいんですけど、人材交流がなかなか難しくて。これはお金が絡むんですけど、来てもらうにも、どこへ行くにもお金がかかる。それで、人材交流が減っていると認識しているんです。それで、学生も井の中の蛙（かわず）みたいになっている。東京・関東に近い。そこではいろんなイベントがあるんですけど、そこへ行くのにもお金がかかるんですよ。ちょっとしたものと泊まらなければならない。そういうことがあって、国内の人的な交流が少ない。教員がやらないと学生もやらない。それを活発化したいと思います。本当は国際交流が日本中で叫ばれているんですけど、その前に信大の場合は国内交流も進めていかなければいけないなあということ。

Q：たしかにいま、声高に“グローバル人材育成”といったことがあちこちで叫ばれていますね。

A：国際交流のほうはいま、協定校をさがしています。大学は大学でやってますけど。理学部もそういう協定校と協定を結んで、学生交流や研究交流をすすめています。でも、まだ2つかな。インドネシアのアルダラス大学というところと、香港の科技（科学技術）大学とは協定を結んでいます。またチュラロンコーン大学（タイ）なんかは進行中。それからタイのカセサート大学、夏に教員と学生を派遣してそれでこれから始めましょうというところまでできています。まあそんなように、国際交流も進めて行こうということです。

ここ10年、「自然のシリーズ」で啓蒙活動をしているんですけど、それを続けていく拠点として使えるような自然科学館というのがあります。大学の支援で作っていただいたのですが、そこを拠点にしたような理科啓蒙、子供に対しては理科で大人に対してはサイエンスなんですけど、理科啓蒙の拠点というか、長野県を中心になるようなそういった計画をしたいな～と思います。それは子供たちに、理科というか自然科学に興味をもってもらおうということと、一般の方への啓蒙は理学部の理解者を増やすとか、もっと進んで支援者を増やしたいですね。



そういうことで4点くらいですかね、(1) 創造性のある人材の輩出、(2) 研究力のある連携した研究環境の構築、(3) 人材交流による活力の創出、(4) 理科啓蒙の拠点化、そういうものをビジョンとして達成していこうと思います。

学生個々の適性に合わせるようにカリキュラム選択の幅を広げる

Q：そうした4つの主な目標に向かうとき、何が必要かということですね。

A：なかなか難しいのですが、まあその一つの具体化として改組をやるんです。9月に認められて、来年4月から改組するわけです。その中で、学生というか若い人材の輩出に関してはカリキュラムを、やはりもう少し体系化してですねやっていくと。「グリーンサイエンス」ということを謳った

ので、その中身については、こういうことが出できたのは「グリーンケミストリー」という化学で最初に出てきているんです。それを「グリーンサイエンス」という言葉で括って、理学部全員が入れるような、ちょっと数学に無理があるんですけど。それで環境配慮するときに、物理、化学については環境の浄化とかですね、環境を守るための材料開発とかテクニックというか方法論の開発というようなことで、一応斬っていく。生物、地学、物質循環学科というのがありますけど、そこは自然環境の保全とか解析、診断、防災みたいなもので寄与できるんですけど、それが実現できるようなカリキュラムを作るということです。

それで学生のニーズとしては、もっと1年とか2年の時から研究を覗いてみたいという要望があるので、それとあと、教員になるような人はもっと幅広く研究したい、学びたいという要望がありましたので、改組計画にはそれを入れて、「標準プログラム」—いままでと同じような卒業研究をやるというもの以外に、「先進プログラム」—1年生のときから研究室に出入りできてまたセミナーにも顔を出せ、先端的な演習、実験、実習が余分に経験できるというものを導入。それからあと「学際プログラム」ということで、卒業研究はやらないでその10単位分をいろんなところの講義をとって、幅広く勉強する。そのときに漠然と講義をとりに行くのではなく、テーマを決めてそのテーマに沿った講義を他の学部も含めて取って幅を広げる。そういうときには教員が相談に乗って、プログラムをつくるという、そんなやり方で改組計画、カリキュラムの改革をすすめています。

TOEIC の受講を全員に必修化し、学生の英語力をぜひとも向上させたい

Q： 英語教育にも力を注がれると聞いていますが。

A： 学生の英語力が低いので、それで TOEIC（ご存知だと思うんですけど）を全員必修化することになります。まあ TOEIC IP というのが過去の問題を使った試験なんですけれど、それだけでは単位にできませんので、全員同じ講義を取らせてですね、具体的にはリスニング&ライティングというんですけど、そういう講義で必修化します。いままでは各学年でライティングなどの講義でも何でもよかったんですけど、その中に TOEIC を受験するというのが義務化されて、同じ講義で必修化して、英語への関心を持ってもらう取り組みをすることにしました。具体化は教務委員会で検討しているんですけど、1年生の時には2回必ず試験を受けて頂く。本当は段々点数が上がっていくらしいんですけど、先日他の学部で先行してやっているところがあるんで聞くと、2極化していて、どんどん上がっていく人と、どんどん下がっていく人がいて、下がっていくというのはよく分からないですけど（笑）、上がっていく人と2極化するんだそうです。理学部からは今回は30人くらい受けたんですが、もちろん他の学部からも受けたんですが、得意な学生が多かったんだろうけれども、他の学部と比べて平均で100点以上成績がいいらしくて、1人は890点とかで、まあ満点に近い。

Q： すごいですね。

A： すごい者もいるんです。本当に皆がそうなら必修化しなくてもいいんですが（笑）。

Q： それは英語の専門の先生とかがつくんですか、どちらの学部の先生ですか？

A： あ、いえ。リスニングは全学教育機構の担当の先生が面倒見てくれることになっています。それ



と、11月に大学祭（銀嶺祭）がありますけれど、そのときに英語で喋る「インターナショナルカフェ」っていうんですけど、日本風に言えば「インターナショナル茶屋」（笑）第1回目を大学祭の時に開催できたらと思っています。留学生にも来てもらって、英語でコミュニケーションするのを始めたい。夏前から計画してたんです。なかなか方法論もよくわからないですがそれでもやってみよう。

理学部の同窓会から5万円の支援をいただいて教材費等々に使うということになっています。

Q： そうですか。理学部同窓会も少しは役に立っていますね。

A： やっぱり何か英語を喋る呼び水が必要です。

Q： 松本では、民間の「インターナショナル・ハンドシェイク」という団体が定期的にそうしたミーティングを開いています。市内から、多国籍、多言語の方が集まり、まあ英語が中心ですが、そこでは食べ物や飲み物をだしたりして、会話を交わしています。私も2、3回来たことがあります、年々盛んになっていますね。面白いですよ。

A： スムーズに会話が進むんですか？

Q： そうですね。中心的に話したい人がいて、つまりキーパーソンのような人がいていろいろ会話をリードしているようです。それに対して全員がしゃべれるようにもっていく。何か言葉が通じたという喜びが結構あったりして、楽めました。

A： やはり、コーディネーターみたいな人がいないと難しいんですかね。

Q： そうですね、放ったらかしでやってくれといっても、うまくいかないかもしれません。ESSとかの協力を得てコーディネーター役に部員を起用したり、留学生とかも入った実行委員会みたいなのをつくって開催するのも一案かと思います。

A： なるほど、そういう知恵がないとなかなかですね。早めにつぶれたりして（大笑）。留学生も、あまり英語を母国語としない、まあ中国とかインドネシアとか、気楽ですね。僕らと同等くらいへたくそというか、まあ我慢して頂ければ通じ合える。まあそんなところです。

「グリーンサイエンス」は持続可能な社会への貢献を念頭に

Q： 話は前後しますが、さきほど「グリーンサイエンス」を打ち出すということがございました。言葉は聞くんですが、実際どういうプロジェクトなのか。その中身について、どのような話なのでしょう。

A： 要するに最初「グリーンケミストリー」というのがあって、ケミストリー（化学）の場合は余分なものを作らない。ですから反応も副生成物ができない、できるような方法は使わない。ほしいものだけを作るプロセスに変えていきましょうとか。それと、作るときに溶媒というか、何か溶かさなきゃいけない時も、水が一番いい溶媒だと。だから、いまベンゼンとか使っているんだったら水に切り替えるような合成法に変えましょうとか。そういった環境に配慮して、持続可能な社会にして貢献するような事を念頭に置いてケミストリー（化学）をやって行きたいというのがグリーンケミストリーの中身です。

それは10項目くらいあるんですけど、その中には省エネルギー、省資源、貴重なものはあまり使わないでありふれたものを使うとか、危険な物質は使わないとか。そういうものだったのですが、それがもうちょっと広がって、ヨーロッパですか、ヨーロッパでは「サステナブル・ケミストリー」というものを打ち出していった。それは「グリーン」というのが緑の党とか政治色があるので、使いません。アメリカでは「グリーンサイエンス」だったんですがヨーロッパでは「サステナブルケミストリー」と呼ばれ、持続可能な化学となったらいいんです。だから中身はそのときにちょっと広がったんじゃないかと思うのです。工学部では「グリーンテクノロジー」とか「グリーンイノベーション」とか言うんです。けど理学部では、イノベーション（改革とか）、テクノロジーとまではいかないの、サイエンスという名前で括っておこうと。ヨーロッパ風のとアメリカ風のとを合わせ持たせて。その時に、化学とか生物・地学とか、自然環境とかといったものを口にして、それを理念として理学で進めましょうということですね。

Q： 方法論的なところでの配慮ということですね。

A： まあ、それらは最後、出口としても。だから始めから最後まで社会に普及してから、何も出さ

ない、全プロセスで何も起こさないように配慮する取り組みだと理解しています。

信大理学部の長所と足りない点について……どこをどう伸ばすか

Q： それではここで、信大理学部の長所とか足りない点について、どうお考えなのか伺わせてください。それを踏まえた具体的な施策などについても、お願いします。

A： まず場所がいいですね（笑）。たとえば、生物とか、物質循環をやるには、世界でもあまりないアルプスの風土・地形とか素晴らしい。理学部が、とういより立地条件がいい（笑）。それを利用した研究ができるし、教育もフィールドへ出かけてやれるということ。ちょっと調べてみたんですけど、地学とか生物とか理学部は皆出かけるんですけど、信州大の場合は他大学に比べて 1.5 倍くらい出かけています。それだけ学生を連れて外に出ているということで、ほんとに立地条件を活かして教育をすすめている。そういう意味では教育としては非常に長所かなと思います。ただ、化学、物理、数学というのはあまり関係がない。そういう意味では長所といってもあまりないんですが、個別性が高い分、連携しにくいので、それが短所になってしまうかもしれません。

Q： なるほど。

A： 今回のミッションの再定義ということのなかでは、「基礎数学」の推進というのが文科省のミッションにあります。あと「高エネルギー物理学」、これは物理の素粒子のひとヒッグス粒子の関係でヨーロッパの CERN（欧州合同原子核研究機関）を使って研究されていた人が評価されたのだと思います。それから科学は「物理化学」なんです。私は「物理化学」なんですけど、信州大学の「物理化学」なので、工学部などあっちこっちに「物理化学」はいますので、どこが評価されたのか分からないんですけど…。もうひとつ理学部のミッションとして、「山岳科学」があり、4つが認められたんです。「物理化学」、化学系は最初入っていなかったんです。けれども「グリーンサイエンス」というのを標榜していますのでね。「山岳科学」のほうは地学と生物、それから「高エネ物理」だけではちょっと困る。成果を生んでいるとして「物理化学」も認められて、ちょうど改組の方針とも合致して、この4分野がこれからの有望分野として重点的に取り組んでいくことになります。（以下次号）



【#このインタビューは2014年10月8日に理学部長室で行われました。時間を大幅に超えてしまいまして、内容も多岐にわたり豊富ですので、急遽、2号に分けて掲載することといたしました。次回後編（会報51号掲載予定）では、このたび発表された学科改組の核心などに迫ります。ご期待ください。】

■ 名月 ■

（「松本平タウン情報」2014年9/18より転載）

宮地 良彦（信州大学名誉教授・物理同窓会名誉顧問）

（・> />）
/ /
/"/?k_

【宮地先生が地元紙「松本平タウン情報」一面の連載コラム『展望台』に寄稿された記事のひとつを全文ご紹介します。ことしの中秋の名月のころに、松本城に観月に出かけられた様子を綴っておられます。さすがは、日ごろから俳句を詠んおられるだけあってたいへんに表現が豊かであるとお見受けいたしました。】



9月8日は白露で中秋の名月。満月は重陽の日の9月9日だが、天気予報が芳しくないで、一日前の9月7日に、松本城へ月見に出かけた。公園入り口のおそば屋さんで軽く腹ごしらえをしてお城に向かう。提灯(ちょうちん)のなかに浮かぶ大手門と、ライトアップされて浮かび上がった天守閣が堀に影を落とし、東南の空には心持ちいびつな十三夜の月が雲の上にくっきりとした姿を見せている。

信州大学時代一緒だった故天白一馬先生の奥様のご好意で、前庭のお茶席で抹茶をいただきながら、月見櫓(やぐら)の雅楽に耳を澄ます。どっかりと据えられた花飾りの色の取り合わせがまた見事である。

ゆっくり上り始めた名月を眺めながら越天楽の優雅な響きを聴いていると、乾ききった大地に水がしみこむように、時間がゆっくり流れてゆき、きしんでいた心の歯車がいつの間にかゆっくり回り始めているのに気づく。

望遠鏡で月のアバタを覗いたガリレイは、もはや神は天に存在しないことを知り、芭蕉は蛙(かえる)が古池に飛び込む水の音で俳句開眼したが、日頃不勉強の小生にはこれといった名句(迷句?)も浮かばず、持参のカメラでむやみにシャッターを切るだけである。

天守にかかる月を見ようと城の北側に回ると、埋の橋のあたりは工事中で、灯(あか)りも少なく足元がおぼつかない。蛙ならぬ老人の水の音になってせつかくの名月が台無しにならないうちに引き上げることにした。

青少年のための科学の祭典 2014 ー松本大会ー を振り返って

竹下 徹 (実行委員長／信州大学理学部物理科学科 高エネルギー物理学研究室教授)

「青少年のための科学の祭典」は全国各地で毎年日本科学技術振興財団が開いています。若い人たちへの科学の面白さ楽しさを伝えいわゆる理科好きを育てる催しものです。(一説には、「理科離れ防止」というネガティブな言い方もあります)

2000年には「青少年のための科学の祭典-松本大会-」を理学部で吉江先生の先導のもとに開き、次の年から理学部主催で夏に開く「自然のシリーズ」のひな形となりました。実は、当時自然誌科学館構想があり、共催形式を取っています。

「自然の」のあとに、「おどろき」(2002年)、「なぞ」(2003年)、「ふしぎ」(2004年)、「まわる」(2005年)、「ささやき」(2006年)、「いろどり」(2007年)、「あそぶ」(2008年)、青少年のための科学の祭典-松本大会-(2009年)、「からくり」(2010年)、「みつめる」(2011年)、「さぐる」(2012年)、「ちから」(2013年)、「青少年のための科学の祭典-松本大会-」(2014年)と毎年欠かさず開催してきました。

2002年に「自然のおどろき」で、私が事務局長をして以来(実行委員長は、当時の伊藤理学部長でした)、13回開いてきました。その間2回「青少年のための科学の祭典-松本大会-」が回ってきて「自然のシリーズ」という名前は使わず「青少年の…」を使っています。「青少年のための科学の祭典」は、

理学部にとってはその意味で「自然のシリーズ」と青少年のための科学の祭典を同一に扱っています。



▲これまでで最高の賑わいをみせた今回の「科学の祭典」の様子。親子連れの家族の姿が目立った。(上)

▲ことしは理学部同窓会も共催となり、恒例の古本市を開催。これらの本は同窓生から拠出されたもの。(下)

さて青少年のための科学の祭典というお題目から想像れる、青少年が来てくれるかという実は、「小学生以下のための科学お遊び」と言うのが実情です。すなわち科学ふれさせようとする、親が小さな子供達を連れて来てくれというのが、参加者の実像です。夏休みの週末に開催するものが要因の一つと思われます。そこで今年は松本、塩尻、安曇野市の全小学生にパンフレットを配布しました。一家に一枚のパンフの効果は絶大で1700人以上の来場者がありました。ただ本題と我が国の状況を考えると、小学生以上の青少年に科学を身近に感じてほしいのが本音です。

しかし、高校生は受験しか目が向いておらず、中学生は活動に忙しくて来てくれません。さらに大学生は、ほぼ無心です。このあたりが、これから私たちが力を入れて展開で行きたい点です。このような事態は10年から変わってません。小学生のときに来てくれて、大きくなってまた来くれたという話は聞きません。それでも若い人たちに対し「科学」を伝える作業は止めるべきではないと考えて続けます。

さて今年が目玉の一つは信州大学自然科学館に設定しました。いかに理学部から離れた科学館に足を運んでもらうか？ そのためにガイドドツアーを組みました。あ

る程度成功したと思っています。理学部では尾関学部長の発案でサイエンスプロムナードと称する、自然科学館を巡る散歩道を整備したいと考えています。自然科学館を常時開館する人員を確保できないのが残念です。

また当日は、理学部同窓会も共催で、古本ブースを設けてくれていました。格安で科学の本を入手できました。多くのブースの出展者は、教員と学生が主ですが、このような例もあるということで、「自然や科学」に絡む広がりも必要と感じています。

最後に雑感ですが、子供達に科学を題材にした遊びを提供すると思って開く、「青少年のための科学の祭典」は、理学部の自由な研究を表現するとても良いお祭りで、より多くの市民と学部の出展者の参加をめざし、次の10年も続けて行きたいと思っています。みなさまも来年はぜひ一度お越し下さい。

信州の秋を想う—岡田君が作った歌

小林善哉（理学2S・電子研／広島市立基町高等学校）

爽やかな秋が訪れました。今、信州の秋はどんなに美しいだろうかと考えるのは同窓生共通の思いでしょう。

私は、3月配信の信大物理同窓会報に「気象学とともに—岡田菊夫君の歩んできた道」と題する小文を掲載していただきました。冒頭、脳出血で意識が戻らない岡田君（2S）の容態について報告いたしましたところ、その後の岡田君の容態を知りたいという声があることを編集部の方からお聞きしました。

考えてみれば、自然研を軸として岡田君の人脈は方々につながっているので、それもうなずけます。それで、この稿を書くに当たり最近の岡田君の様子をお知らせし、併せて彼にまつわる一つの話をご紹介しますと思います。

岡田君のその後の容態

脳出血で現在も意識が回復せず、立つことも座ることもできず、ものを言うこともできない状態が依然として続いています。さらに、脳幹に損傷を受けているため体温調整という基本的な機能が十分に働かず、たびたび高熱が出たりしています。そして、最近ではベッドに寝たきりの生活が長く続いているため、手足に拘縮（関節を動かさないために、次第に 関節の動く範囲が狭くなった状態）が見られるようになってきました。奥さんは毎日々々岡田君に明るく話しかけながら、手足のマッサージを続けています。

私はこの8月に同期生の斎藤君と一緒にお見舞いに行ってきました。奥さんは、同期生をはじめ多くの方々にいつも気づかっていたいただいていることに感謝しておられました。

岡田君が作った歌

昨年の秋のことです。私は、学生時代に岡田君が作った歌の一節を無意識のうちにふと口ずさんでいました。自分でもはっとして、その歌を思い出そうとしたのですが断片的にしか思い出せません。覚えていたのは、歌の出だしと終わりです。

歌の出だしは、

「夕暮れ山道とんぼ道、
ならんで空を飛んでゆく・・・」

そして終わりは、

「すすきが一揺れしたならば
東の空に瘦せた月
空のとんぼはもういない」

というものです。



これは初秋の信州の情景でしょうか。いや、もっと秋が深まったころでしょうか。澄み切った信州の秋の空気は夕暮れには冷気となり、その中をとんぼがすいすいと飛んでいる情景が浮かんできます。しかし、私がここで信州の秋について書くことは、同窓生の皆さんにとっては蛇足でしょう。皆さんそれぞれがあの信州の秋の情景を今でも鮮烈に心に描いておられると思うからです。

私は、卒業して何年か後に岡田君にもう一度この歌の歌詞と曲を教えてほしいとたのんだことがあります。すると、この歌を覚えていてくれたことをうれしく思っているという手紙とともに、歌詞と手書きの楽譜が送られてきました。楽譜が読めない私は、妻にその曲をバイオリンで奏でてもらい、「そうそう、まさしくこの曲だ」と心から懐かしかった記憶があります。

それから何十年もたっていますが、この手紙と譜面を見つけようと家中探したのですが、どうしても見つかりませんでした。本当に残念です。

▼元気な頃の岡田君（右）と筆者（中）、同期の斎藤君（左）（岡田君の自宅前で）



これ以上手がかりがないので、私は岡田君の奥さんに電話して歌のことを尋ねてみることにしました。すると、奥さんは、

「大学時代菊夫さんが秋らしい詞に曲をつけたのですね。すごい！でもそんな話、聞いてないのです。何も聞いてないので、知らないのですよ。でも、よく覚えていてくださいました。そんなことがあったのですねー！」

と言ってとても驚いていました。

奥さんにしてみれば自分の知らない岡田君の別の一面ですから、知りたいと思うのは当然です。奥さんはどんな歌かしきりに聴きたがっている様子でした。それで、断片的ながら電話口で歌ってあげました。そして、もし岡田君の耳が聴こえているなら、この歌を聴けば何か反応を示すかもしれないと思いました。それで、「ぜひ岡田君の耳もとで歌ってあげてください」と言いました。そして、電話口で奥さんに何回も何回も繰り返し歌を教えました。へたくそな歌だと分かっていましたが、そんなことは言っていられません。私の脳中に、遺跡の土器の破片のようにわずかに残っている歌を岡田君に届けるにはこれしかないのです。

私も奥さんも何か起こるのではないかと期待していたのですが、現実はそんなに甘くはありませんでした。奥さんからの報告では、「菊夫さんをびっくりさせようと、浮き浮きして、耳もとで『夕暮れ山道とんぼ道 並んで空を飛んで行く』と何度も歌ったのですが反応が全くありません。淋しいですね。」とのこと。奥さんまでがっかりさせて申し訳なく思いました。

後日談

それから数日後のこと、岡田君の奥さんは、自分が師範を務める日本舞踊の家元にこの話をしました。すると、家元はたいそう感激し涙をこらえながらこうおっしゃったそうです。

「感動しました。覚えてくれた方は何て凄い人でしょう。もしご主人が病気をしなかったら、あなたはこの歌やご主人の音楽について知らずにいたかも知れませんね。」

家元は感じるどころがあったのでしょうか。この話を流派の機関誌に載せました。

皆さんにお尋ねします

皆さんのうちどなたか岡田君が作ったこの歌を知っている人はいませんか？出来ればこの歌の歌詞と楽譜を完全な形で奥さんに渡してあげたいと思うのです。

私の記憶では、作詞は数学科1Sの森淳氏（理学部同窓会長）で、曲を付けたのが岡田君です。その後、岡田君の奥さんは森淳氏に直接尋ねたようですが、森氏は憶えていらっしやらなかったとのこと。随分古い話なので、森氏が忘れたとしても当然かもしれません。しかし、今見つけておかないこのまま埋もれてしまいそうですし、私一人の思い出話で終わっては岡田君がかわいそうです。

皆さんの中に、この「夕暮れ山道」（正式名ではありません）の歌について何かご存知の方がいらっしゃいましたら、是非お知らせください。よろしくお願いいたします。

結婚報告では、びっくりマーク(!)の入ったメールが飛び交う

大下 英敏 (理学 96S・高エネルギー研究室／高エネルギー加速器研究機構 茨城県在住)

今 高エネルギー物理学研究室 (HE 研) の研究室世話人をしております大下と申します。現在は茨城県つくば市にある高エネルギー加速器研究機構で研究員として働いています。大学四年の卒業研究から博士過程に至るまで、HE 研に所属し、竹下教授、長谷川准教授にお世話になりました。それほど優秀な学生ではありませんでしたが、二人の恩師の丁寧な指導のお陰で何とか卒業することができました。

学生時代の思い出としては、当時、共通教育棟にあった竹下さんの居室を間借りして、実験セットアップを組み上げたことです。竹下さんの居室は古いモニターや計算機で溢れていて、お世辞にもきれいとは言えませんでした。その入り口は常に大きく開け放たれており、気軽に訪問できる雰囲気がありました。ここで使用した実験器具は一時代前の中古品で、故障することも多く、修理しながら実験したことを覚えています。個人的に良い実験結果を出すのは難しかったのですが、ここで実際に手を動かした経験が今でも役に立っています。修士課程からはヒッグス粒子探索をおこなう ATLAS 実験に参加しました。昨年度のノーベル物理学賞は「ヒッグス粒子の発見」に対して授与されており、実験的発見に大きく貢献した ATLAS 実験にわずかな期間でも携われたことはとても良い思い出です。

同窓生のつながりは、世話人の怠慢のために、それほど活発ではありませんが、結婚を報告する卒業生や竹下さんの還暦を祝うために信州に集うアグレッシブな同窓生もおります。結婚を報告すると、竹下さんからいつも以上にびっくりマーク(!)の入ったお祝いの返信が届きます。私もびっくりマークのたくさん入った返信を受け取ったくちで、披露宴前日の宴席では、竹下さん、長谷川さんを含めて旧交を温めることができました。



これまで HE 研は国際共同実験 (ATLAS 実験、ILC 実験、Belle 実験) に参画し、それに関連する研究開発を推進してきました。実際、ILC 実験で使用を予定している MPPC (Multi-Pixel Photon Counter) と呼ばれる次世代光検出器においては国内のパイオニア的存在であり、国内外から注目される存在です。これもひとえに、竹下さんをはじめとする HE 研にたずさわった全てのスタッフ、学生さんの成果に他なりません。今後も、OB の一人として、HE 研のこれまで以上の活躍を期待し、見届けたいと思います。

マリアナ諸島慰霊巡拝記

寺尾 洵 (元信州大学理学部物理科学科・物性理論研究室教授 三重県桑名市在住)

厚労省の補助金事業として「日本遺族会」は戦死者遺児による訪問団を派遣しています。平成 26 年度は 17 地域への派遣を計画し遺族会サイトに公表しています。

私は父がサイパン島で戦死したので、「マリアナ諸島地域慰霊友好親善訪問団」に志願しました。遺骨収集団派遣事業は廃止され戦死者の半数程度が放棄されましたが、訪問団派遣は継続しています。余

り知られていないのでその経験を紹介します。

【準備段階】 市遺族会を通じて報告があり、県遺族会に申込みました。手続きについては社協事務局が助けてくれました。除籍簿には「南洋群島方面で戦死」と記載されていました。八月に採用通知があり遺族会と旅行社から分厚い文書が届きました。参加費は9万円で、県・市の遺族会から5万円補助がありました。

9月24日(水) 靖国会館で結団式と旅行社による説明がありました。高齢での初の海外渡航に戸惑う方も多いようでした。参加者は24名(70～78歳)、それに団長、事務局員の副団長、添乗員の27名でした。靖国神社に参拝、御神酒を頂き成田に移動、夕食は壮行会ということで、ビールが添えてありました。



9月25日(木) 朝食を済ませ空港に移動、飛行機は順調でグアムに早めに到着し、ホテルで静かに心の準備を整えました。

9月26日(金) グアムでは慰霊祭を二度行いました。祭礼は参加者の父の戦死地点の近くに祭壇を据え、「戦没者之霊」の牌を置き、靖国神社の神酒、遺児が持参した故郷の水などを供え、「般若心経」を唱和、焼香し、遺児がお父さんに向かって追悼文を朗読し、最後に「ふるさと」または「里の秋」を皆で献歌し、記念撮影で結びます。

最初は、島中部北西海岸のアサン岬で空母「大鳳」乗員の愛娘が沖合に向かって追悼しました。次に、この岬の背後の高台「本田台」で甲府第49聯隊、善通寺第43聯隊所属のお父さんを娘達が追悼しました。

この後、一旦サイパンへ寄り、セスナ機に分乗してテニアンへ急ぎました。草だらけの大きな滑走路四本が平行に並んでいるのが眼下に見えました。海軍の第一飛行場で、米軍がB29用に延長して、Little Boy搭載のエノラ・ゲイは一番北の滑走路から離陸しました。

9月27日(土) 翌朝は南端のカロリナス岬でテニアン第56警備隊所属のお父さんを息子が追悼しました。第56警備隊と第83防空隊の慰霊碑がありました。警備隊は海軍ですが陸上部隊で司令が大佐ですから陸軍歩兵聯隊に相当するのでしょうか。飛行場建設の毎日だったそうです。

昼食後サイパンに戻り慰霊祭を二度行いました。まず、アスリート飛行場、現在の国際空港、前に残る酸素製造施設と戦車の残骸の前に祭壇を据え、松本第150聯隊所属のお父さんを駒ヶ根から参加の愛娘が追悼しました。次に、西のオレイイ海岸沿いのチャランカノア街中の交差点にある慰霊碑前に祭壇を据え名古屋第43師団の静岡第118聯隊と経理勤務部所属のお父さんを6名の息子達が追悼しました。声を詰まらせ先へ進めない人もおりました。

9月28日（日） この日は四回の予定で、最初にタッポーチョ山に四駆のワゴン車に分乗して登りました。山上は展望台が整備されてガラパンの町まで一望できました。米軍の大型貨物船が四隻沖合に停泊、これは、グアムの海兵師団が一ヶ月戦える物資を積載して備えているとのこと。ここでは、岐阜第136 聯隊所属のお父さん2名を娘達が、高崎第 15 聯隊所属のお父さんを息子が追悼しました。私の父が駐屯していたガラパンや海を眺めながら、この地では珍しい薄に囲まれて「里の秋」を歌っていたら胸が熱くなりました。

山を下りるとサイパン神社でした。神社の拝殿が塗装作業の最中で、広場に祭壇を据えました。第55 警備隊に所属しガラパン町の南部に駐屯していた父も屹度参拝したに違いないと思うと胸が一杯になりました。ここでは、海軍の第五特別根拠地隊の2名、第55 警備隊、第226 設営隊、第五根拠地隊各1名の父達を私を含む4人の息子と一組の姉弟が追悼しました。私は母を納骨したとき西本願寺で貰い受けた式章を掛けて追悼しました。桑名では有名な銘柄で父の好物と母に聞いた小倉羊羹と純米吟醸を供えました。

この姉弟の父君はサイパン支庁の文官で、第五根拠地隊に現地召集され戦死しました。その姉は昭和十九年四月に小学校の入学式はあったが学校へ行くと先生が何か少し話をして今日は帰れと言う毎日で勉強しないうちに米軍の来寇があった。ここには父と時々遊びに来た。階段や坂道は昔のままと話していました。よくぞご無事で。

次に、北方のマッピ岬やパナデル飛行場跡を広く見下ろせるマッピ山の高い崖の上に祭壇を据え第503 海軍航空隊のお父さんを息子が追悼しました。この時はご希望により「海ゆかば」を献歌しました。

この崖からサイパン高女生徒の集団を含む民間人が多数飛降り、米兵はここを **Suicide Cliff** と呼びました。「戦陣訓」への激しい怒りがこみ上げました。

バスで西海岸の美しい浜を眺めながら5 軒程南の地獄谷へ向かいました。地獄谷では足場が悪いということで谷の入り口に祭壇を据え名古屋第135 聯隊所属の二人、及び、第25 歩兵团司令部所属のお父さんを息子達が追悼しました。最後の司令部跡で南雲中将が戦陣訓通りに「生きて虜囚の辱めを受ける勿れ」と訓示して自決した場所です。**翌日**、副官が総攻撃・突撃を命令して、三千名余が死にました。



ホテルへの帰路、途中で砂を採取しようと浜辺に降りたところに堡塁と戦車が残っていて、ここでは松本50 聯隊の120名と岐阜136 聯隊とで六千の米上陸部隊を迎え全滅したとのこと。後に、この辺りの浜はバンザイ突撃で死んだ日本兵がごろごろ転がる醜い姿を米軍が撮影した所です。副団長は父がこの辺りにいた可能性は非常に高いと教えてくれました。このような椰子の木と海を見て父は転がっていたのかも知れないと歯を食いしばりました。

9月29日（月） 午前中、総合病院を訪問し車椅子を寄贈し友好親善を図りました。

午後は、日本政府が設置した「中部太平洋戦没者の碑」を会場にして、在サイパン領事、自治政府係官を招いて、全戦没者の慰霊祭を行い団長が追悼文で日米戦争の巻き添えにして620 名を犠牲にしたことを詫言いました。この祭礼は政府事業なので「君が代」を歌いますが事前に、我々は昭和天皇の弥栄を歌いたくないから「君が代は」を「日の本は」と言い換えようを提案する方がいました。

夕方は賓客を招待してパーティ、その後、もう少し話そうという声があり、我々の共通点は「お父さん」と呼ぶ機会がなかったことである。戦争は絶対の悪と確信し、再び戦争をする国にしてはならない。そして、健康に留意して三年後に靖国で再会しようと約束する展開となりました。

以上

平林 喜明 (文理6回/松崎研究室 元当同窓会会長 茅野市在住)

今回、諏訪市文化センターが文化財として国の登録を受けたとのこと、おめでとうございます。

今までこの建物を維持管理された市や、多くの方々の努力の賜物であることは間違いありません。

ところで私は、一精密工業会社を60歳で定年となってから70歳でやめるまで、9年間余り派遣会社経由でここで働かせていただいたのは大変幸せなことでした。色々思い出はありますが、三例ばかりどうしても忘れられないことがあるので書いてみます。



▲諏訪市文化センター外観（諏訪市のHPより）

劇場（ホール）の入り口広場には上品なライトが21本吊り下げられているが、これが全て手造りで、厚さ5mmぐらいで長さが150cmもあるプラスチック板が84枚も使っている。

長年の間にこのプラスチックが劣化して5枚ぐらいに亀裂が入っていたのである。垂直に長く吊った5kgもある硬い板が、たてに頭上から落ちると致命的であることはすぐに予想できるわけである。対策として近代的な市販品のラ

イトに交換しようという話が持ち上がっていたのは当然であった。

学卒後就職してしばらくして買った古い理科年表の本の膨張係数（温度による変化）を調べると、プラスチックのようなものは金属に比べて10倍ぐらいであることがわかった。この長尺板を5本のネジで普通に止めると、ネジの部分から亀裂が発生するのは当たり前のことだと判断した。

そこで5穴のうち、中央の穴は直径5mmぐらいとし、その上下の穴は幅5mmでも長さ8mm、さらに端の穴は長さ11mmの長穴とした（温度変化を -15°C ～ 65°C と想定）。

図面を作り、フライス加工を依頼することができた。取付精度を上げるために中間金属板を設計したが、これによる明るさの減少は10%ぐらいであって、とにかく以前の見栄えと同じように復元することができた。

※

それから十五年程後、諏訪市文化祭を見る機会があり、これらのライトを見上げると無事であり、修理の時に割れていた板はエポキシ剤で接着したのだが、これさえ剥がれていないことがわかった。

この調子だと、あと何十年も持ちそうだなと自己満足をした次第である。

雨漏りの点検では平面屋上に厚さ4mmもある高価そうな防水シートが張られてた。残念ながらこの厚さのものが膨張したのだから、その時の力が強くて接着が時と共に剥がれてシートは波打ち、降雨後にはあちこちに水たまりができる始末であった。

隙間を見つけてはシリコンをつめたが、この程度では到底及ばないのであった。隣接する公民館にはシンプルな薄いシートが接着されているのだが、これは無事なのである。

そこで、屋上シートの張り替えには公民館と同じ普通の薄いシートを指定してもらうよう、提言した。

一番困ったのは、ホール客席天井への雨漏りであり、大勢のお客が入るステージがある時は、天気ば

かりを気にしていた。

もし、お客さんに雨が落ちれば、この会場の評判を落とすことになるし、建て替えだ。予算がどうのということになるのは目に見えていた。

この大屋根の修理は小生の退職の後になったので、見届けることが出来なかった。しかし、次のような意見だけは述べておいた。

大屋根は大きい、そこで二重屋根にしたらどうか——という案である。「今の屋根をそのままにしてタル木を取り付ける、これに追加の屋根を張る」。効果の期待は①取り去り工事不要②工事中、雨が降っても良さそう③二重屋根で空気層ができ断熱効果あり④「第一に安上がりな案だと思う」と。

その後、気になって眺めてみると屋根の勾配が裾のあたりでわずかに変わっている。おそらくタル木が使われ、それらの厚みをうまく整えたのであろう。費用も数千万円の中に収まったので予算取りできたと話に聞いたような気がする。

小生気になるものとして、吊り天井の耐震性がある。現在、主要な橋については橋桁に固定することをやめ、橋が動けるようにして、太いスプリング等でゆるく位置を決める工事が進められているようである。劇場の吊り天井についても、全く新調のような形ではなくても共鳴共振を防ぐ方式を工夫されて、末永くこの文化財が存続することを願います。

それにしても小生のような立場の人間の意見を参考にされたり、苦しい財政の中で予算を取り、この文化財を維持されました市・職員・協力会社・利用市民の方々の御努力に対し頭の下がる思いです。

■ 住所不明の同窓生についてのお願い ■

理学部同窓会では同窓会名簿の整備を進めようとしてしており、物理同窓会に以下の方々の住所問い合わせがきています。物理同窓会では学年幹事をとおして住所確認を行っておりますが、皆様方の中で以下の方々の住所をご存知の方がおられましたら、物理同窓会事務局名簿担当 小西 義雄（2S）<メールアドレス：mag01456@nifty.com>までご連絡頂きたく、よろしくお願い致します。

物理学科、物理学専攻 1966年～1989年入学者の連絡先不明者

学籍番号	名前	学籍番号	名前	学籍番号	名前	学籍番号	名前	学籍番号	名前	学籍番号	名前
		7S120	辻 猛志	13S045	今沢 秀章	16S046	池田 享	20S051	大澤 伸行	23S085	松本 亘央
		8S025	青木 芳雄	13S047	上田 徹也	16S051	岡本 直之	20S052	大田 裕之	23S088	諸田 昭宏
		8S041	清水 豊彦	13S049	小口 京吾	16S054	香取 昭夫	20S054	小篠 史郎	23S090	脇田 博美
		8S047	徳永 勉	13S051	面 幸一	16S066	林 徹	20S079	山本 茂広	24S060	大野 逸人
1S038	生駒 哲夫	9S039	広瀬 由美子	13S052	神林 賢蔵	16S069	松下 徳彦	21S050	岡澤 友治	24S065	小暮 博人
1S051	夏目 和久	9S044	金 長道	13S053	久保田 幸子	16S076	山本 政弘	21S053	掛水 隆史	24S069	笹田 達治
1S061	真野 政敏	9S046	小林 洋二	13S055	清水 将幹	17S055	金子 卓史	21S055	川上 聡	24S071	高田 昌豊
2S044	木下 賢一	9S048	澤井 淳	13S057	多川 正	17S059	倉田 和茂	21S056	川口 正	24S073	多喜乃 剛
2S050	久保田 勝	9S049	城田 俊英	13S059	立田 秀信	17S079	松本 博之	21S073	西森 一夫	24S074	田中 正長
2S051	斉藤 四郎	9S052	辻 登志夫	13S060	平林 治	17S080	三井 隆久	21S079	松本 京子	24S075	塚田 岳
3S039	河村 誠	10S038	今井 定雄	13S063	鴛沢 秀雄	17S082	百瀬 佳典	21S083	梁瀬 直子	04SM03	野呂 幸夫
3S044	鈴木 倫明	10S045	五味 裕人	13S065	鳥海 聡	18S047	阿部 晃	22S053	内川 森	05SM04	小宮山 勝
3S048	永沢 栄	10S056	林田 敏夫	13S068	中川 直	18S048	阿部 雅人	22S070	武原 一記	08SM06	尾崎 牧人
3S050	早川 建	11S034	泉 国寿	13S069	橋詰 敦夫	18S058	河本 祐之	22S071	田中 篤	09SM05	藤井 元忠
3S051	速水 貞博	11S048	酒井 正道	13S072	山本 直樹	18S062	佐野 聡明	22S072	田中 栄治	11SM04	今泉 寛
3S053	福森 潤一	11S057	広瀬 裕一	13S075	吉田 豊	18S063	鈴木 康仁	22S083	山口 祐治	13SM06	島田 元之
3S056	松本 晴夫	11S067	吉田 隆哉	14S048	伊藤 泰	18S064	高橋 知隆	22S086	渡辺 淳	13SM07	溝口 卓哉
4S046	藤原 勝幸	12S045	岡田 芳美	14S053	吉地 輝朗	18S065	土屋 直樹	22S087	渡辺 学	14SM04	小島 剛
4S056	若園 修	12S046	加藤 健二	14S065	坪田 光永	18S066	戸崎 健	23S051	青木 誠	14SM05	鈴木 幸彦
5S033	有西 隆夫	12S054	越村 克夫	14S074	藤野 和美	18S072	本間 直樹	23S054	荻原 富士弥	14SM06	土田 知弘
5S037	川口 裕次	12S058	佐野 和博	15S045	青木 真波	18S073	松沢 草介	23S061	古賀 真之	15SM07	野村 琢治
5S040	坂口 博信	12S063	俵 裕子	15S047	阿部 文昭	18S075	松本 尚平	23S062	小嶋 徹	15SM08	古畑 誠
5S041	新貝 講治	12S067	南雲 悟	15S055	木村 文彦	18S080	安池 恭	23S065	白川 栄治		
5S046	津田 栄嗣	13S042	浅原 陽介	15S061	瀧澤 由美	18S211	棚橋 英蔵	23S067	鈴木 知寿		
6S059	吉田 正夫	13S044	石渡 健司	15S064	中村 篤	19S071	村田 光寿	23S072	田中 完和		

思い出の情景

●青木治三（文理1）さんより過去に投稿いただいた貴重な写真をご紹介します。

第1回物理卒業生9名（卒業式当日）

前列左から松崎先生、向井先生、竹村先生、
第2列左端、眼から上だけの方が百瀬さん
(当時助手?)、右端は技官(?)の方。
卒業生は、先生方のご努力でひとりの浪人
もださず、高校教諭として就職していった。



信大文理学部第1回卒業記念写真（1953年3月27日）

卒業式の前夜は松本市としては珍しい大雪であった。朝には、校門付近は巨大なクリスマスツリーの林立となっていた。そのヒマラヤスギも、後年、枝が大量に打ち落とされ、うら寂しくなってしまったが、当時は下を通るのに頭を下げなければいけなかった。



＜再掲＞■「同窓会費」は終身会費として1万円。『会計細則』決まる！■

1. 同窓会費は終身会費として1万円とする。一括払いを原則とするが、本人からの申し出があった場合は事務局長が分割払いを認めることができる。
2. 事務局長名で金融機関に同窓会の口座を設ける。事務局長が通帳・印鑑を管理する。会計担当がカードを管理して口座からの出し入れなどを行う。
3. 在校生からの同窓会費徴収は、事務局が徴収日を決めて実施する。徴収後、在校生の会費支払い者リストは、すみやかに会長ほか、会計担当および関連事務局員に伝達する。
4. 金融機関への振込み手数料は会員の負担とする。
5. 会計担当は、年1回開催する総会を利用したり、メールで呼びかけたりして、卒業生からの会費徴収に勤める。
6. 毎年開催の同窓会総会における参加費の徴集など会計管理については、その年の幹事が担当し、事務局が補佐する。必要経費は事務局から事前に仮払いのかたちで支出できる。幹事は開催後しかるべく早く収支を事務局に報告し清算する。
7. 会計年度を4月から翌年3月とする。会計はすみやかに決算報告を作成して会計監査担当から監査を受ける。
8. 本細則の改正は総会で行う。

▼下記いずれかの口座に | 同 | 窓 | 会 | 費 | のお振込みをお願いします！

武田三男（たけだみつお） 住所：390-8621 松本市旭 3-1-1

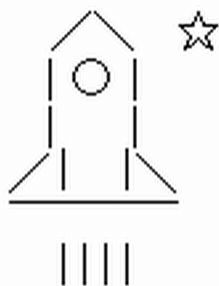
◆銀行の場合／八十二銀行 信州大学前支店 店番号：421 普通預金 口座番号：650215 口座名義：
信大物理同窓会 代表者 武田三男（たけだみつお） 住所：390-8621 松本市旭 3-1-

◎編集後記◎

◇・・・メルマガの本号に恩師鷺坂先生からの原稿を頂くためにお願いを致しましたが、若干の介護のお世話になっていらっしゃるご様子で、奥様によるご支援（聞き取りによる草稿）の期待がございましたが、難しいご様子でした。早くのご快復を祈ります。（H.T）

●・・・退職されて8年、寺尾先生に原稿をお願いしたところ、今号に掲載させていただいたように戦死されたお父さんの慰霊記を寄稿いただきました。読むうち、先生の悔しい思い、無念さが胸に突き刺さりました。先の大戦で日本だけで約300万人の死者があり、南洋諸島にはまだ約100万人の兵士の遺骨が回収されずに眠っているといわれます。尊い死を無駄にしないためにも、戦後の我が国の戦争をしない仕組みを守るべきではと思います。

●・・・この会報もいつの間にか50号。当同窓会の正式な発足を呼びかけた準備号の第1号が2001年11月30日ですので、足掛け15年間、準備号の4号を含めると54号の発行をしてきたことになります。この間に会長も3代。よく続いたものだと思います。これからも発行を継続するには、編集委員の若返りが必須です。あなたも編集委員になりませんか。連絡をお待ちしています。



●・・・全国的に、長野県内でも市町村の人口が流出あるいは減少するなかで、松本市、安曇野市では減らないばかりか逆に微増さえする状況。小生の周りでも、ある有名人が移住してきました。信大医学部出身の菅谷（すげのや）松本市長（宮地先生は元後援会長）が「健康寿命延伸都市」を掲げ、それが評価されているのも一因。松本はイベントや演奏会などがたいへん盛んで、サッカーチーム松本山雅（やまが）も来年からJ1リーグ昇格がほぼ決定しました。信州松本はこれから、ますます賑わいそう。（MT）

○・・・10月18日（土）文理学部東京同窓会に参加しました。開学65周年記念同窓会になります。参加人員約50名、文理学部は現存しませんのでこの同窓会の会員は減少する事は有り増加する事は無いので、まあ妥当な参加数です。最若年で70歳前後、高齢化しておりますが、個性豊かで、意気盛んで精神的には老化しておりません会員でした。

○・・・先回7月に夏号を発行して、やれやれとひと休みしたところですが、既に10月も中半を過ぎてしまい秋号の発行に至ってしまいました。無常迅速、待ったなし、残された時間は少ないです。この間、理学部は6科制から2科7コースに移行する変化がありました。新理学部長・尾関教授の抱負が語られておりますが、少ない研究費のなかでの理学部運営のご苦労が伺われます。

○・・・本会誌は今回50回記念号になります。皆様のお陰と高藤編集長の根気を要するご苦労によりここまで継続して参る事が出来ました。これを機会に画面をPDF形式に刷新して、きれいにして読み易くしました。またメモリーが軽くなる為に写真・カットが容易に入りますのでイメージし易くなり内容の理解が深まると思います。会員各位の投稿意欲も高まると思います。皆様の積極的な投稿をお待ち致します。（MM）

● 信州大学物理同窓会会報 0050号（2014年秋号） SUPAA BULLETIN No. 50 ●

● 2014年10月28日発行 ●

□ 編集・発行／信大物理同窓会事務局

《編集委員》松原正樹(文理 10) 高藤惇(2S) 渡辺規夫(4S) 太平博久(6S)

□編集長：高藤 惇 □ 発行人：根建 恭典

■当会報のWE Bでの閲覧サイト：<http://www.supaa.com/kaiho/index.html>

■当会へのメールの宛先：<http://www.supaa.com/postmail/postmail.html>

(C)信州大学物理同窓会事務局 無断複製・転載を禁ず
